

論文審査の要旨

|   |                |    |       |
|---|----------------|----|-------|
| 博士の専攻分野の名称  | 博 士 （ 教育学 ）    | 氏名 | 伊 木 洋 |
| 学位授与の要件   | 学位規則第4条第1・2項該当 |    |       |
| 論 文 題 目   |                |    |       |
| <p style="text-align: center;">大村はま話しことば学習指導実践体系の考察<br/>—国語教科書及び指導資料等に見られる話しことば教育観を手がかりとして—</p>   |                |    |       |
| 論文審査担当者   |                |    |       |
| 主 査 教 授 山 元 隆 春   |                |    |       |
| 審査委員 教授 難 波 博 孝   |                |    |       |
| 審査委員 教授 間 瀬 茂 夫   |                |    |       |
| 〔論文審査の要旨〕   |                |    |       |
| <p>本論文は、主として戦後の国語教師が話しことば教育実践をどのようにしてつくり上げていったのかということ、新制中学校国語教師であった大村はまの仕事に焦点を当てて考察したものである。とくに大村はまが作成に関わったと思われる国語教科書や大村自身が残した指導資料を手がかりにして、その学習指導実践体系（学習指導実践の構造）を明らかにするものであった。</p> <p>本論文は、序章（研究の目的と方法）、第1章（大村はま話しことば学習指導に関する研究の成果と課題）、第2章（昭和20年代の大村はま話しことば学習指導）、第3章（昭和30年代の大村はま話しことば学習指導）、第4章（昭和40年代の大村はま話しことば学習指導）、第5章（大村はま話しことば学習指導実践体系の考察）、結章（研究の総括と展望）、から構成されている。</p> <p>序章には、国語教師・大村はまの話しことば学習指導実践体系を考察する意義が示され、考察のために使用する資料と研究の方法が示されている。</p> <p>第1章では、大村はま話しことば学習指導研究の概観がなされたのち、大村はまが編集に関わった国語教科書及び資料に関する諸研究の整理・検討がなされた上で、大村はま話しことば学習指導研究の成果を集約し、残された研究課題が提示されている。</p> <p>第2章～第4章は、大村はまのかかわった国語教科書と実践資料等を対象として、10年ごとに考察しながら、大村はまの話しことば学習指導の推移を明らかにしている。</p> <p>第2章では、教育図書発行の『国語中学校』所収の無署名教材を中心にした考察がなされている。学習記録「国語の技術 単元3話について」を詳細に分析・検討し、『国語中学校』所収教材が戦後の話しことば学習指導の出発点で果たした役割が考察されている。解説資料「単元と言語経験の表について」の検討も加え、昭和20年代の大村はま話しことば学習指導の特徴が述べられている。</p> <p>第3章では、筑摩書房昭和31年版『国語』及び『国語 学習指導の研究』を考察の対象として、中学校各学年での話しことば学習指導教材がどのように構成され、そのつながりがどのように考えられているのかということ、を分析・考察した。いずれも大村はまが深く関わった国語教科書と学習指導書の検討を通じて、昭和30年代の大村はま話しことば</p> |                |    |       |

学習指導の特徴が述べられている。

第4章では、教育出版『新版標準中学国語』のとくに話し合い・討議を主とした単元の検討が行われている。「話し合い・討議」の学習指導をどのように進めればいいのかということや、また特徴的な「話し出し」指導の意義について考察した上で、昭和40年代の大村はま話しことば学習指導の特徴が述べられている。

第5章では、第2章から第4章の考察をうけて、大村はま話しことば学習指導実践体系の考察が示されている。序章（研究の目的と方法）に提示されていた「大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるか」「大村はま話しことば学習指導はどのようにして創りあげられていったのか」「大村はま話しことば学習指導は実践の場に何を残したのか」という三つの研究課題に応じるかたちで考察が展開されている。

第一の研究課題に関しては、大村はま話しことば学習指導を「導入期」「拡大期」「深化期」「集約期」の四つの期を通して形成されたものとして考察している。第二の研究課題については、自身の授業実践での発見を基盤としながら、独自の教材や単元を開発していくなかで、話しことば学習指導の形骸化を避けるような提言が行われていたことを明らかにした。また、学習者の思考を促すために多様な質問モデルを示す質的な指導を重視する方向性なども明らかになった。第三の研究課題については、従来話しことば教育史研究が明らかにした成果に照らして考えると、大村はまの場合、実践現場で話しことば学習指導に取り組む指導者たちにとって、実践の具体的なイメージをもたらす指導論が展開されていたところに大きな特徴があったとした。

第5章第4節では、大村はま話しことば学習指導の構造的な特徴を、本論文全体の考察の成果として記述した。大村はま話しことば学習指導体系を支えていたのが「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育成する願いに基づく、「民主社会」を形成する話しことばの「担い手」として自立することを目指すという構造に見出すことができるとした。

結章では、各章で明らかになった成果と今後の課題について記述されている。

本論文は次のような点で意義と特色を認めることができる。

(1) 先行研究者が未検討の国語教科書や指導資料を発掘し、大村はまの「話しことば学習指導」研究のなかでまだ明らかにされてこなかった「話しことば」教材の作成とその活用の実態を明るみに出し、戦後初期の「話しことば学習指導」に関する「教材」作成実態を、大村はまの実践記録や、国語教科書教材の考察を通して解明した。

(2) 戦後のすぐれた国語教師に焦点を当て、その歩みを跡づけることによって、教科単元学習の基礎として「話しことば」学習がどのように形成されたのかということや、実践指導の体系（構造、仕組み）を把握し、考察しえた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和3年2月12日